

透明な朝

最初は、乾いた絵の具が付いたのだと思った。

洗面所の白い蛍光灯の下で、私は右手の人差し指を眺めていた。爪の付け根、ほんの五ミリほどの範囲が、うっすらと白い。粉を吹いたようでもあり、薄い氷膜が張ったようでもある。水を流し、石けんでこすり、タオルで拭いても、落ちない。

それどころか、触れた感触がなかった。

痛くも痒くもない。熱もない。そこだけが自分の身体から切り取られたように、静かだった。私は指先を頬に当ててみたが、頬の温度だけが分かり、指の温度が分からない。

不思議と焦りは湧かなかった。気味の悪さより先に、奇妙な感想が浮かんだ。

——きれいだ。

光を当てると、その白はわずかに透明で、内部に細かな筋が走って見える。雪の結晶を顕微鏡で覗いた時のような、過剰な秩序。人間の皮膚に属するものとは思えない、冷たく完成された構造だった。私はスマホのライトを近づけ、角度を変えた。白は白のまま、しかし透け、反射し、ある瞬間だけ、指先の内側で光が折れた。

玄関の鏡に映る自分は、眠そうな顔をしている。指先だけが、別の生き物のように静かに輝いていた。

仕事でも、私は時々、机の下で指を見た。キーボードを打つ感覚はある。だが、あの白い部分だけは、沈黙したままだった。ペンを握ると、そこが硬いものに触れている気がする。硬いのに、痛くない。痛みがないことが、いちばん不安を呼ぶはずなのに、私の心は妙に落ち着いていた。

昼休み、私は皮膚科を予約した。理由は恐怖ではなく、確認だった。汚れではないと分かった以上、次は「これは何か」を確かめるしかない。

夕方、診察室は乾燥していて、アルコールの匂いがした。白い壁、白いカーテン、白い照明。私の指先の白と、同じ色が並んでいるのに、指先だけが異物として浮かび上がる。

医師は五十代くらいで、眼鏡の奥の目が疲れていた。だが私の指を見た瞬間、その目の焦点が少しか鋭くなった。

「いつからですか」

「今朝です。気づいたら、こう……」

私は指先を差し出す。医師はすぐには触れず、まず距離を取り、目だけで観察した。次に、手袋を箱から取り出す。薄いビニールが擦れる音が、やけに大きく聞こえた。

医師はライトを点け、指先に光を当てた。照明の角度を変え、さらに机の引き出しから小型の拡大鏡を出した。近づけるたびに、医師の呼吸が浅くなる。

「痛みは？」

「ありません」

「痒みは？」

「ありません」

「冷たい、熱い、そういう感覚は」

「そこだけ、分からないです」

医師は私の指先の白い部分の周囲を、綿棒で軽く押した。押された感覚は周辺で分かるが、白いところはやはり分からない。医師は一度手を止め、今度は私の爪を少し持ち上げるようにして、白い部分の境界を見た。

「境界が……妙にきれいですね」

彼は独り言のように言い、すぐに咳払いをした。

「ええと。色素脱失の一種にも見えますが、通常の白斑とは違う。表面が……反射しますね」

医師は私の指を、ほんの一瞬だけ、強めに押した。私は痛みを期待したのに、何も起きない。医師の指先だけが、慎重に力をかけているのが分かる。

「硬いですか」

「硬い、というか……」

言葉が見つからない。硬いのに、硬さがこちらに返ってこない。触れるというより、触れられている。

医師は体温計を当て、続いて小さな超音波のような器具を当てた。画面にはよく分からない線が動くだけだった。医師は眉を寄せたが、結論を急がなかった。結論がないことを、先に理解しているようだった。

「血流は保たれています。炎症もない。外傷もない。感染症の所見も……今のところは、ない」

「じゃあ、何なんですか」

私がそう聞いた時、医師は少しだけ口角を上げた。笑ったのではない。うまく言えば、興味の輪郭が出た。

「分かりません。分からないものは、分からないと言うしかない」

その言い方は、誠実だった。だが、どこか嬉しそうでもあった。

「ただ、進行するようなら、すぐ来てください。写真も撮っておきましょう」

医師は診察台の脇にある小さな機械を持ち出し、レンズの付いた先端を白い部分に当てた。画面に拡大された指先が映る。白の中に、規則正しい線が無数に走り、皮膚の模様とは似ても似つかない。医師は画面を指でなぞり、言いかけてやめた。

「通常の角質では……こうは、ならないんですが」

彼はその先を言わなかった。代わりに、私の指先の周囲の皮膚をもう一度押し、白い部分には押さない。押さないことが、押すことより雄弁だった。

「大学病院で詳しく調べる、という選択肢もあります。ただ、今日の時点では検査項目が立てにくい。まずは経過です」

医師はタブレットで指先を数枚撮影した。光の当て方を変え、白がどう透けるかを確認するように。撮影が終わると、彼は手袋を外し、ゴミ箱へ捨てた。最後に、また私の指先を見た。

「……失礼ですが」

彼は言葉を探すように間を置いた。

「とても、きれいですね」

その言葉の後、医師は一度だけ目を伏せ、手洗い場で指先を長く洗った。水音が続く。まるで自分の手から、何かの「見たもの」を落とすように。洗い終わると、彼は私を見ずに処方箋の用紙だけを差し出した。薬は出なかった。紙だけが出た。

私は診察室を出て、受付で会計を済ませた。廊下のガラス窓に、自分の指先が映った。白い。透明で、白い。

外へ出ると、街は夕暮れで、信号機の赤がガラスのように濡れた道路に映っていた。私は無意識に指先を胸の前に持ち上げた。赤い光が白い部分を通り抜け、内部で鈍く曲がって、指の腹に細い線を落とす。まるで小さなレンズだ。指は私のもののはずなのに、私の身体がその光を「観察している」感じがした。

帰宅して洗面台で手を洗うと、水滴の付き方が違った。白い部分だけ、水が粒になって弾かれ、すぐに滑り落ちる。皮膚ではなく石に近い、と頭が勝手に判断した。だが石なら冷たいはずなのに、冷たさも分からない。私は指先を唇に当て、ほんのわずかに歯を立ててみた。痛みはない。代わりに、歯が何か硬いものに触れた感覚だけが残った。

夜、ベッドの上で恋人にメッセージを打った。「明日、会える?」。返事はすぐに来た。「朝、寄るね」。何気ないやり取りの中で、私は指先をもう一度ライトにかざした。透ける。白の中に、細い筋が増えている気がした。

怖い、と思うべきなのに、私は思わなかった。代わりに、もう少し見たいと思った。どこまできれいになるのか、と。

眠る前に、私は浴室の鏡の前で指をもう一度見た。白い部分は少し広がっているように見える。鏡の曇りを指で拭くと、白い部分だけが跡を残さず、透明な線がずっと走った。湯気の中で、その線が一瞬だけ虹色に見えた。

私はシャワーを浴びた。湯が指に当たる。周囲の皮膚は温かいのに、白い部分は相変わらず沈黙している。沈黙は怖くない。沈黙は、むしろ優しい。眠る前の部屋が静かなほど、安心するように。

ベッドに入って電気を消すと、暗闇の中で白い部分だけがわずかに光を持っている気がした。残光ではない。光がないのに、白だけが白として残る。私はそれを見届けるように目を閉じた。

翌朝、目が覚めると、部屋は静まり返っていた。カーテンの隙間から、朝の光が差し込んでいる。白く、やわらかい光だ。私は起き上がろうとして、動けないことに気づいた。

正確には、動いている感覚がなかった。

視線を落とす。腕が見える。脚もある。だが、それらは色を失っていた。肌はすべて、同じ透明な白に覆われている。指先で始まったそれは、一晩ですべてを置き換えていた。

恐怖はなかった。

痛みも、息苦しさもない。心臓の鼓動すら、もう感じない。それでも意識ははっきりしていた。むしろ、驚くほど澄んでいる。

体の内部を、光が通り抜けていくのが分かる。骨も、筋肉も、血管も、すべてが均一な構造体になり、朝の光を屈折させている。カーテンの揺れが作る影が、私の体の上を滑り、しかし影は濃くならない。影が影になりきれないまま、透明な白の中に溶ける。

窓辺のガラスが揺れ、光が分裂する。私の胸のあたりで、小さな虹の斑点が生まれては消えた。プリズムのように、私は光を割っている。自分が部屋の「照明器具」になったようで、滑稽で、しかし滑稽さすら遠い。

私は理解した。

これは死ではない。破壊でもない。

完成だ。

人間という未完成な形が、静かに最終形へと移行しただけだ。恐怖や痛みを抱えた柔らかい生き物から、何にも傷つかない構造物へ。私は何かを失ったはずなのに、失った感覚がない。失うことさえ、ここでは静かに省略される。

視界の端が、少しずつ白く滲んでいく。意識が薄れているのではない。むしろ、余計なものが削ぎ落とされている。音が遠くなるのではなく、音という概念が薄くなる。

最後に浮かんだ感想は、ひどく単純だった。

――朝の光は、こんなにきれいだったのだろうか。

鍵の音がした。

玄関で、金属が回る。靴を脱ぐ布の擦れ。バッグが床に置かれる鈍い音。恋人はまだ私を呼ばない。部屋の中の異様な静けさを、彼女の身体が先に感じ取っている。

足音が近づく。廊下の板がきしむ。ドアノブが回り、ゆっくりと開く。

彼女のスマホが震えた。着信だろう。彼女は画面を見て、すぐに消した。誰かに「今、無理」と言う代わりに、沈黙を選んだ。沈黙の方が、この部屋にふさわしいと判断したように。「……え？」

恋人の声だった。声は途中で切れた。私は返事をしようとしたが、声は出なかった。出ないというより、声を出す必要が、もう私の中で成立していなかった。

彼女は一步、部屋に入った。次の一步が出ない。空気が固まったように見えた。彼女の視線が、ベッドの上の私を捉え、そして動かない。

しばらくして、息を呑む気配が伝わってきた。

悲鳴ではなく、嗚咽でもなく、彼女が最初に漏らしたのは、かすれた吐息だった。

「……なに、これ」

恐怖よりも先に、理解不能なものを前にした人間の声だった。

光を受けて、私の身体は淡く輝いている。影すら透明だ。生きていた痕跡はすべて消え、そこにはただ、精密な結晶構造だけが残されている。髪の毛の一本一本までが、光を通す細い糸になっている。瞼は閉じているはずなのに、光が中へ入っていくのが分かる。

恋人は震える手を伸ばしかけ、止めた。触れてはいけないと、本能が告げていたのだろう。彼女は指先を宙に浮かせたまま、距離だけを測り直す。近づけば、何かが変わってしまう。遠ざかれば、二度と戻れない。

それでも、彼女は少しだけ前へ出た。私の頬の近くで、光が屈折するのを見て、息を吸った。美しい、と言いかけて、言葉が落ちた。

彼女はゆっくりと自分の手を見下ろした。

右手の指先。爪の付け根に、かすかな白が浮かんでいる。私の始まりと同じ色だった。

彼女はそれを見つめ、次に、窓から差す光を見た。光は変わらない。部屋も変わらない。変わったのは、彼女の目だけだった。

彼女はカーテンに手を伸ばし、ためらってから、少しだけ開いた。朝の光が増え、私の身体の中で白が白へと層を作る。透明の中に、さらに透明が生まれる。彼女は息を止め、光の角度を変えるようにカーテンをほんの数センチずつ動かした。美しさが増減するのを、確かめている。

彼女はもう一度、私の身体を見てから、自分の指先に浮かんだ白を、確かめるように見比べた。

彼女は自分の指先を窓辺へ寄せ、光を探すようにゆっくり回した。白はまだ薄い。彼女の視線はすぐ私へ戻り、そしてまた指先へ戻る。何も言わないのに、部屋の中で「もっと」が静かに育っていった。

その見比べる往復だけが、彼女の呼吸を整え、恐怖を別の欲求へ変えていった。

外では鳥が鳴いた気がした。彼女はそれを聞かなかった。

三ヶ月後。

部屋は、静かに完成していた。

壁も、床も、天井も、同じ透明な白に置き換えられ、時間の埃だけが、内部に薄く閉じ込められている。

窓から差し込む光が、かつての輪郭をなぞり、

部屋の中央に横たわる二つの形を、ゆっくりと照らした。

そして、陰さえも白かった。

(完)